



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(6) : 家族形態別にみた生活の変化と夫婦関係
Author(s)	岸田, 泰子; 田村, 毅; 倉持, 清美; 中澤, 智恵; 久保, 恭子; 及川, 裕子
Citation	東京学芸大学紀要. 第6部門, 技術・家政・環境教育, 56: 25-30
Issue Date	2004-11-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2988">http://hdl.handle.net/2309/2988</a>
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

## 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (6)

—家族形態別にみた生活の変化と夫婦関係—

岸田 泰子\*・田村 毅\*\*・倉持 清美\*\*・中澤 智恵\*\*  
久保 恭子\*\*\*・及川 裕子\*\*\*\*

生活科学

(2004年7月30日受理)

KISHIDA, Y., TAMURA, T., KURAMOCHI, K., NAKAZAWA, C., KUBO, K., OIKAWA, Y. : The impact of child rearing experience on the parental growth and marital relationship (6) : Changes in lives and marital relationship from the view of their family structure. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Sect. 6, 56 : 25-30 (2004) ISSN 1341-1705

### Abstract

We investigated changes in family life and marital relationship from the view of their family structure by quantitative questionnaire survey before the first childbirth. Although we estimated there were some differences between the family structure ; i. e. nuclear and extended families, the main results were as follows.

- 1) Both husbands and wives of the nuclear families had significant cognitive awareness that husbands' actively shared the household chores than those of the extended families.
- 2) Husbands of extended families had expected their partner's change in life after childbirth more than husbands' of the nuclear families.
- 3) Before childbirth when the couples had no children, there were only a few differences by the family structure that marital relationships of the nuclear families were more satisfactory than the extended families. (in Japanese)

**Keywords** : child rearing, parental growth, marital relationship, family structure

*Department of Home Economics, Tokyo Gakugei University, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

### 1. はじめに

本研究のプロジェクトでは、はじめて子どもをもつ夫婦・カップルが妊娠・出産・子育てというプロセスの

中で経験する家族関係・夫婦関係をどのように形成し、変化させていくのかを明らかにし、医学・看護学・心理学・社会学・教育学等の多様な観点から分析検討を重ねている。

すでに、各分野の先行研究レビュー<sup>1)</sup>をはじめ、妊

---

\* 島根大学  
\*\* 東京学芸大学生活科学学科 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)  
\*\*\* 共立女子短期大学  
\*\*\*\* 埼玉県立看護大学短期大学部

娠期の夫婦・カップルを対象とする質問紙調査とインタビュー調査の結果を報告し<sup>2)3)</sup>、出産という未知の経験に不安を持ちながらも、子どもをもつことへの大きな期待と夢を描いていることが示された。また妊娠期の質問紙調査の自由記述の分析から<sup>4)</sup>、夫の長期的な見直しから、親としての自信や経済力の面での不安が見受けられた。さらに妊娠期と出産後4ヶ月の時点での比較により夫婦共に結婚生活・夫婦の親密性が大きく低下していることもわかり、Belsky<sup>5)</sup>と同様の結果が得られた。

ところでこれまでわれわれの分析の中では、世代を超えた家族の影響を検討してこなかった。また先行研究においても、拡大家族への着目は少なく、世代間の影響に関する研究は希少である。家族形態による子育てのちがいや家族内の性役割分担は必然的に起こりえるであろう。核家族が進行する現在でもなお地方では拡大家族が存在する。比較によって核家族の特徴もまた浮き彫りにされ得る。そこで本稿では、家族形態によって夫婦の生活がどのように変わり、また夫婦関係に影響するののか否かを検証することを目的として検討を行う。

## 研究方法

### 1. 調査方法

東京都・埼玉県・神奈川県・茨城県・鳥根県・愛媛県の保健・医療機関での母親学級・両親学級を通して、妊娠期の夫婦・カップルを対象に実施した第1回目の質問紙調査を分析する。調査時期は、2000年7月から2002年3月までで、6,289組の夫婦・カップルに調査票を配布し、郵送により第1回目調査に1,841組(回収率29.3%)から回答を得た。それらのうち核家族と拡大家族のサンプリングを以下のように行った。

### 2. 分析方法

本調査の対象者の内訳をみると、夫と妻のみが同居する核家族と2世代以上が同居する拡大家族の割合は、核家族1,591(86.4%)に対し、拡大家族125(6.8%)でサンプル数の偏りが大きくあった。したがってサンプルのマッチングを行い、その結果得られた核家族群125組と拡大家族群125組の2群を比較した。マッチング項目は、夫の年齢(平均29.71歳)、妻の年齢(平均27.57歳)、居住地区(東京地区105組:鳥根15組:愛媛5組)、妻の就労(専業主婦74組、勤労婦人38組、その他13組)とした。

比較検討した各項目とそれぞれの信頼性係数につい

ては以下のとおりである。なお、同居家族についての質問項目を妊娠期(第1回)のみしか行っていなかったため、経時的変化の比較は行っていない。また、妊娠期においてすでに里帰りしていると考えられるデータは除外した。

### 3. 調査項目

#### 妻の項目

- ・ 妊娠によるマイナートラブル(「よく眠れない」「疲れやすい」「腰痛」「食欲不振」「イライラ」「気分の落ち込み」「悪阻(つわり)」「高血圧」「体のむくみ」)の9項目、高得点ほど症状が強くなるよう設定、Cronbach's  $\alpha = .625$ ) この項目は妻だけにたずねた。
- ・ 抑うつ感情(「毎日が何となくおもしろくない」「世の中に取り残される」「ひとりぼっちで寂しい」「生まれる日を待っている生活は楽しい」)の4項目、高得点ほど抑うつ感情が高くなるよう設定、Cronbach's  $\alpha = .783$ )
- ・ 子どもからのプラスの影響(「子どものおかげで自分も成長する」「子どもが自分の生活に充実をもたらす」)の2項目、高得点ほど良好であるよう設定、Cronbach's  $\alpha = .636$ )
- ・ 夫の子育てへの期待(「子どもの入浴」「子どものオムツを取り替える」「子どもとあそぶこと」「子どもに食事を食べさせる」「子どものしつけ」)の5項目、高得点ほど期待が高くなるよう設定、Cronbach's  $\alpha = .684$ )
- ・ 夫の家事協力度(「食器洗い」「風呂掃除」「洗濯物を干す」)の3項目、高得点ほどよくする、Cronbach's  $\alpha = .684$ )
- ・ 自分の生活の変化(「自由な時間が減る」「仕事の時間が減る」「睡眠時間が減る」「家事の分担が増える」「友人との交流が減る」)の5項目、高得点ほど変化が大きくなるよう設定、Cronbach's  $\alpha = .671$ )
- ・ パートナーの生活の変化(自分の生活の変化と同様の5項目、Cronbach's  $\alpha = .576$ )
- ・ 生活の満足度(「仕事」「友人関係」「余暇」「トータルに考えた、現在の自分の生活」)の4項目、高得点ほど満足度が高いように設定、Cronbach's  $\alpha = .667$ )
- ・ 自分の親、パートナーの親との関係の満足度(各1項目)
- ・ パートナーに対する満足度(「思いやり・やさしさ」「家事の分担」「コミュニケーション」「性生

- 活(セックス)」「収入」の5項目, 高得点ほど満足度が高いように設定, Cronbach's  $\alpha$  =.661)
- ・ 親意識「お腹の赤ちゃんをいとおしく感じる」「母親になるという実感がある」の2項目をそれぞれ個別に, 高得点ほど良好になるよう設定)
  - ・ Quality Marital Index<sup>6)</sup> (以下QMI, 6項目, Cronbach's  $\alpha$  =.666)
  - ・ Marital Love Scale<sup>7)</sup> (以下MLS, 4項目, Cronbach's  $\alpha$  =.676)
  - ・ Dyadic Adjustment Scale<sup>8)</sup> (以下DAS, 2項目, Cronbach's  $\alpha$  =.538)
  - ・ 相談できる人的サポート  
複数回答で人的サポートについてたずね, 家族形態別に $\chi^2$ 検定を行った。

#### 夫の項目

- ・ 抑うつ感情 (Cronbach's  $\alpha$  =.558)
- ・ 子どもからのプラスの影響 (Cronbach's  $\alpha$  =.740)
  - ・ 子育ての意欲 (「子どもの入浴」「子どものオムツを取り替える」「子どもとあそぶこと」「子どもに食事を食べさせる」「子どものしつけ」の5項目, 高得点ほど意欲が高くなるよう設定, Cronbach's  $\alpha$  =.681)
- ・ 夫の家事協力度の自己評価 (Cronbach's  $\alpha$  =.701)
- ・ 自分の生活の変化 (Cronbach's  $\alpha$  =.669)
- ・ パートナーの生活の変化 (Cronbach's  $\alpha$  =.626)
- ・ 生活の満足度 (Cronbach's  $\alpha$  =.656)
- ・ 自分の親, パートナーの親との関係の満足度 (各1項目)
- ・ パートナーに対する満足度 (Cronbach's  $\alpha$  =.670)
- ・ 親意識「お腹の赤ちゃんをいとおしく感じる」「父親になるという実感がある」の2項目をそれぞれ個別に, 高得点ほど良好になるよう設定)
  - ・ QMI (Cronbach's  $\alpha$  =.600)
  - ・ MLS (Cronbach's  $\alpha$  =.650)
  - ・ DAS (Cronbach's  $\alpha$  =.479)

以上の項目について居住する家族形態別に「核家族」と「拡大家族」の群に分け, まず等分散性の検定を行い等分散性が認められた項目ではその後, 一元配置分散分析を行った。等分散性が棄却された項目についてはWelchの検定を行った。夫についても, 同様に行った。

本研究における分析はすべてSPSS for Windows Ver.12.0Jを使用した。

Table 1 同居家族別に見た割合

同居家族	度数	%
夫婦のみ	1,591	86.4
夫婦と夫の家族	100	5.4
夫婦と妻の家族	25	1.4
その他	125	6.8
合計	1,841	100.0

## 結 果

### 1. 分析対象者の割合と属性

同居家族別の割合は, Table 1に示したとおりである。1,841組のうち夫婦のみの核家族が1,591組 (86.4%), 夫婦と夫の家族 (夫の父母どちらかまたは両方を含む家族) が100組 (5.4%), 夫婦と妻の家族 (夫の父母どちらかまたは両方を含む家族) が25組 (1.4%) であった。このうち夫の家族と同居の100組, 妻の家族と同居する25組の計125組を拡大家族として取り扱った。

また, すでに記述したように拡大家族125組の属性にあわせて, 夫の年齢 (平均29.71歳), 妻の年齢 (平均27.57歳), 居住地区 (東京地区105組: 島根15組: 愛媛5組), 妻の就労 (専業主婦74組, 勤労婦人38組, その他13組) となるようにマッチングを行った。

### 2. 家族形態別に見た比較

Table 2に平均値の比較を示した。

核家族, 拡大家族において有意差がみられた項目は, 妻では夫の家事協力, 夫でも家事協力であり, いずれも核家族の夫の方がよく協力していた ( $p < .001$ )。また夫では, 出産後のパートナーの生活変化について, 拡大家族の夫の方が大きく変わるのであろうと答えた ( $p < .01$ )。パートナーに対する満足度では, 核家族の妻のほうが拡大家族の妻よりも高い傾向がみられた ( $p < .10$ )。親との関係についてみると, 核家族の夫のほうが拡大家族の夫よりも自分の親との関係に満足しており ( $p < .01$ ), また核家族の妻は拡大家族の妻に比べてパートナーの親, いわゆる舅, 姑に対する満足度が高かった ( $p < .05$ )。

親意識についてはおおむね高い平均値ではあるが, 検定において核家族の妻のほうが, 拡大家族の妻より「赤ちゃんをいとおしく感じる」傾向がみられた ( $p < .10$ )。

夫婦関係では, 3つの尺度を使用しているがQMIで核家族の妻が拡大家族の妻よりも高い傾向を示し ( $p < .10$ ), またMLSでは核家族の夫が拡大家族の夫よりも高い傾向を示した ( $p < .10$ )。

Table 2 核家族と拡大家族の比較 (1元配置分散分析)

項目	Range	妻					夫				
		核家族 N=125		核大家族 N=125		F値	核家族 N=125		核大家族 N=125		F値
		Mean	S. D.	Mean	S. D.		Mean	S. D.	Mean	S. D.	
妊娠によるマイナートラブ	9-36	19.6	3.7	19.8	4.2	0.1					
抑うつ感情	4-16	6.7	2.6	6.7	2.7	0.0	5.6	1.5	5.7	1.8	0.6
子どもからのプラスの影響	2-8	7.6	0.8	7.5	0.8	0.9	7.3	1.1	7.3	1.1	0.1
夫の子育てへの期待 (夫は「子育ての意欲」)	5-20	16.1	2.3	16.2	2.2	0.1	17.8	2.2	17.8	1.8	0.1
夫の家事協力度	3-12	7.1	2.7	5.7	2.6	19.0***	7.2	2.7	5.7	2.6	19.0***
自分の生活の変化	5-20	15.3	3.1	14.7	3.0	2.0	12.6	2.8	13.2	2.8	2.4
パートナーの生活の変化	5-20	12.4	2.8	12.1	2.4	1.0	15.9	2.9	17.1	2.4	11.6**
生活の満足度	4-16	12.2	2.0	12.0	1.9	0.7	11.3	2.2	11.3	2.1	0.1
パートナーに対する満足度	5-20	16.4	2.5	15.8	2.7	3.2†	16.6	2.5	16.6	2.6	0.0
自分の親との関係	1-4	3.4	0.7	3.0	0.7	5.3	3.2	0.7	3.0	0.8	6.9**
パートナーの親との関係	1-4	3.2	0.7	3.0	0.9	5.1*	3.2	0.7	3.2	0.7	0.8
親意識											
お腹の赤ちゃんをいとおしく感じる	1-4	3.8	0.4	3.7	0.6	3.8†Welch	3.7	0.5	3.7	0.5	0.5
母親(父親)になる実感がある	1-4	3.1	0.8	3.0	0.8	0.8	2.9	0.8	3.0	0.9	0.5
QMI	1-46	34.6	5.1	33.0	6.2	3.3†	34.3	5.6	33.2	6.2	1.3
MLS	0-12	9.2	1.8	8.7	2.1	1.9	9.3	1.8	8.7	2.4	3.2†
DAS	0-6	4.1	1.2	3.9	1.3	1.6	4.1	1.0	4.0	1.3	0.9

\*\*\*P&lt;.001, \*\*P&lt;.01, \*P&lt;.05, †P&lt;.10

Welch : 等分散性の検定後 Welch の検定

### 3. 家族形態別にみた相談できる人的サポート (妻の回答)

妻に対して、妊娠や出産、その後のことについて相談できる人は誰かを複数回答でたずねた結果を家族形態別に比較したところ、Table 3 のような結果が得られた。最も多かった相談相手は核家族、拡大家族とも自分の母親であった。次に多いのがいずれも学校時代の友人であるが、拡大家族のほうが有意に多かった ( $p<.01$ )。次に多かったのが夫の母親であり、拡大家族の方が有意に多かった ( $p<.05$ )。自分の姉妹と答えた者も両群とも20%台あったが、家族形態による有意差は認められなかった。

### 考 察

本調査では、3世帯同居の拡大家族の割合は1割未満であったが、柏木<sup>9)</sup>は、3世帯家族の減少が進む中で、妻の親との同居は増加傾向を見せていることを指摘している。これは、働く女性が気兼ねせずにサポートを頼める自分の親への期待でもあり、社会的・経済的に保育状況が厳しくなっている昨今、ある意味合理的なことであろう。本調査においても女性たちの相談相手として最も期待されているのは家族形態によらず実母であった。母親にとって最も身近なモデルは実母であ

り、それは核家族のように離れて生計を立てるものにとっても変わらないようである。また夫の母親への相談については、拡大家族のほうが有意に多く、これは同居の影響であろうと考えられる。身近にいればこそ、子どもをもつ女性の先輩として、相談相手にもなり得るのであろう。本調査では期待するサポートの種類は問うてはいないが、祖父母たちの中でも特に頼りにされると考えられる祖母たちに対しても、子育て全般に関する知識の提供や技術の習得を含めた支援体制が望まれる。

また相談相手について言えば、学校時代の友人への相談は、家族形態により有意差が見られた。このことは、拡大家族では、幼少期から過ごした地元での生活を続けるものが多く、比較的至近距離に学校時代の友人が存在するためではないかと考えられる。相談相手としては、距離的に身近にいる存在であることが推測できる。隣近所の関係や昔で言う地縁の結びつきが希薄である現在、核家族のように孤立しがちな新しい家族にとって、友達や仲間作りの場を広げる支援もまた大切な子育て支援となり得る。

核家族と拡大家族の夫婦間に最も特徴的な差異は、夫の家事協力度であった。核家族の夫のほうが拡大家族の夫に比べて家事協力が多という結果である。これは夫婦共にそれを認めていた。拡大家族であれば、下位システムとして祖父母夫婦の存在があり、家事労



Table 3 家族形態別にみた妻の相談相手 (複数回答)

	核家族 N=125		核大家族 N=125		x <sup>2</sup> 値
	人数	%	人数	%	
自分の母親	94	75.2	106	84.8	2.0
夫の母親	48	38.4	75	60.0	4.2*
学校時代の友人	55	44.0	81	64.8	8.4**
子どものいる近所の人	25	20.0	17	13.6	1.3
病院で知り合った人	21	16.8	14	11.2	1.1
自分の姉妹	29	23.2	37	29.6	1.3
夫の姉妹	16	12.8	25	20.2	0.9
その他の親せき	17	13.6	18	14.4	0.0
その他	22	17.6	20	16.0	0.4

\*\*P&lt;.01, \*P&lt;.05

働はおそらく祖母に分担されていることが予測される。その中で、新しい夫婦の夫が家事を協力する割合は必然的に減っていると考えられる。このことが影響しているのか、核家族の妻のほうが、拡大家族の妻に比べて夫に対する満足度が高い傾向を示していた。家事協力を含め、生活を共同するという感覚が高いことが妻の生活満足度を高めている可能性がある。

親との関係では、いずれも核家族の妻の方がパートナーの親との関係の満足度が高く、核家族の夫の方が、自分の親との関係の満足度が高いという結果であった。妻は舅・姑に対してやはり距離をおいているほうが良い関係を保ち得るのか。しかしながら夫のほうは、自分の親との関係が核家族という離れた立場のほうで高く、同居することが妻と自分の親との間での摩擦を生じ、その満足度を下げている可能性が考えられる。女性にとって、親との同居は、結婚条件の1つと言われており<sup>10)</sup>、それがパートナーの親となると女性には生活上のストレスともなり得るのであろう。

本調査の結果における、妊娠中に「お腹の中の赤ちゃんをいとおしく感じる」という女性側の回答で核家族の妻の方が高い傾向、夫婦関係でQMIに核家族の妻に高い傾向、MLSで核家族の夫に高い傾向など、いずれも核家族における下位システムが強く結びつく傾向を示すものであり、このことは核家族の特徴を示すものであると考えられる。

ところで諸井<sup>10)</sup>は、核家族の重要な機能として性役割化が強化していることをあげ、男女の役割が固定化することは歪みをもたらすことを指摘している。それは暴力や虐待という形での家族の問題である。本調査ではこのような問題までは把握しかねるが、核家族の特徴の1つとして今後の出産後の夫婦の役割変化にも注目したい。

松岡<sup>11)</sup>によれば、核家族よりも直系家族世帯(夫方、妻方とも)のほうが、妻の生活ストレスは高く、また

ライフステージ、つまり子どもの年齢によってもそのストレスに差が生じている。子どもの成長につれ、育児、教育などの様々な問題に直面することで、夫婦関係をはじめとする生活による変化が生じる可能性がある。しかし本調査で、拡大家族の夫は出産後の妻の生活変化が大きくなることを予測していることから、拡大家族の中での妻の多重役割を心配しているのではないかと考えられる。Cowan<sup>12)</sup>は、夫婦間の子産後の生活変化の差異と夫婦満足度は関連があるとしており、出産後に家族形態によって、夫婦満足度に違いが生じる可能性がある。

本研究では、第1子を迎える夫婦に限っているという点で、ともに生活してきた時間自体がまだ浅いということも、違いを明確にできなかった要因であろうと考えられる。また本研究では、出産後の家族形態についてたずねておらず調査票においてその変化を追うことが困難であるが、面接調査などを通して機会を改め、家族形態の違いによる夫婦関係の経時的変化を追跡していきたい。

本研究の限界として、家族形態に着目し、東京、島根、愛媛という日本各地のデータをあわせて解析し、首都圏と地方の特色については考慮しておらず、今後の課題としたい。

## 付 記

本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(2)(課題番号13480021 研究代表: 田村毅)を受けて行なったものの一部である。

## 引用文献

- 1) 田村毅, 倉持清美, 中澤智恵, 及川裕子, 岸田泰子: 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響について

- の予備的研究, 東京学芸大学第6部門 52集 pp.27-43, 2000.
- 2) 倉持清美, 中澤智恵, 田村毅, 及川裕子, 木村恭子, 岸田泰子: 妊娠期の夫婦の特徴—第一次質問紙調査とインタビュー調査から—東京学芸大学第6部門 53集 pp.73-81, 2001.
  - 3) 田村毅, 倉持清美, 中澤智恵, 岸田泰子, 木村恭子, 及川裕子, 荒牧美佐子, 持田恭子, 森田千恵: 妊娠・出産体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (1) —出産前後の面接調査のまとめ—東京学芸大学第6部門 54集 pp.41-56, 2002.
  - 4) 倉持清美, 田村毅, 中澤智恵, 及川裕子, 岸田泰子, 木村恭子, 森田千恵, 持田恭子, 荒牧美佐子: 妊娠・出産体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (2) —質問紙自由記述から—東京学芸大学第6部門 54集 pp.57-67, 2002.
  - 5) Belsky, J, Kelly, J. : 子供を持つと夫婦に何が起こるか, 草思社. 1995.
  - 6) Norton, R.: Measuring marital quality : a critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 141-151. 1983.
  - 7) 菅原ますみ, 詫摩紀子: 夫婦間の親密性の評価—自記入式夫婦関係尺度について—, *精神科診断学*, 8 (2), 155-166. 1997.
  - 8) Fincham, F.D.& Bradbury, T.N.: The assessment of marital quality: a reevaluation. *Journal of Marriage and the Family*, 49, 797-809. 1987.
  - 9) 柏木恵子: 社会変動と家族発達, 柏木恵子 (編), 結婚・家族の心理学: 家族の発達・個人の発達, ミネルヴァ書房, 5-50. 1998.
  - 10) 諸井克英: 夫婦関係学への誘い 揺れ動く夫婦関係, 京都, ナカニシヤ出版. 2003.
  - 11) 松岡英子: 有配偶女性のディストレスとその規定要因, 高橋勇悦監修, 石原邦雄 (編), 妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク—, 東京, 東京都立大学出版会, 121-150. 1999.
  - 12) Cowan, C., Cowan, P. : When Partners Become Parents: The big life change for couples. Lawrence Erlbaum Associate, London, 1992